令和２年度高野遺跡発掘調査概要

1.　調査の経緯

高野遺跡は、縄文時代から近代にかけての集落遺跡です。公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県からの依頼により、六地蔵地区ほ場整備工事に伴う高野遺跡の発掘調査を平成 30 年度から実施しています。

2.　これまでの発掘調査の状況と概要（図１・図２）

高野遺跡は、旧野洲川が形成した扇状地の扇頂部に位置し、東西南北約１㎞の範囲にわたって広がっています。昭和 57 年（1982 年）に宅地造成に伴う調査が実施されて以来、複数次におよぶ発掘調査が行われてきました。これまで縄文時代前期から近代に至る遺構・遺物が発見され、特に古墳時代前期を中心とした県内でも有数の大規模集落が形成されていたことが明らかになっています。

令和元年度調査では、古墳時代前期・後期の竪穴建物跡 15 棟を検出しました。また、古代東海道(1)推定位置に近接する場所からは、３間×３間の総柱で南北約４ｍ×東西約５ｍの掘立柱建物跡（倉庫跡か）が見つかっています。この倉庫跡の北側では古代東海道の南側溝と考えられる溝跡も発見されました。

3.　調査の成果

（１）東海道に関わる遺構（図３・写真１～４）

高野遺跡の南端部にあたる六地蔵地区では、歴史地理学の研究成果などから、古代東海道が横断していると推定されていました。そのルートは近世東海道(2)と異なり、栗東市伊勢落から栗東市手原の間を直線的に東西に通っていたと考えられており、令和２年度調査対象地の一部が推定地に該当しています。

調査の結果、その推定地において東西方向に平行して延びる２条の溝跡が見つかりました（S1、S2・S250）。溝跡の規模はいずれも幅約１ｍ、深さが約 20～50 ㎝で、溝の間の芯々距離は約 16ｍを測ります。この溝跡は令和元年度調査で検出された古代東海道南側溝の延長と考えられます。

検出された２条の溝跡の間には同時期の遺構が分布せず、南側溝が令和元年度調査で見つかった倉庫北側の溝の延長と考えられることから、道路に伴う遺構だと考えられます。

溝跡から奈良時代から平安時代初頭に使われていた須恵器や土師器、瓦などが出土していたことから、道路は平安時代初頭を中心とした時期に機能していたものと考えられます。

（２）道沿いの様子について（写真５～10）

道の北側には古墳時代から平安時代初頭までの旧河道跡が見つかっています（写真５・６）。この旧河道跡からは、古墳時代から平安時代初頭まで幅広い時期の遺物（須恵器・土師器・瓦・砥石など）が出土しています（写真７・８）。特に旧河道跡西側での遺物の出土が多く、かつ、不良品のような土器も見られることから、物資の集積場の可能性もあります。

また、特筆すべきものとして、銅鉱石の脈石(3)が出土しています。今年度調査区内で金属生産を行っていたとみられる遺構もありますが、これらについては調査中のため、その詳細は今後明らかになっていくものと思われます（写真９・10）。

道が通される以前の遺構としては、竪穴建物跡が７棟見つかっています。古墳時代前期のもののほか古墳時代後期のものがあり、７世紀前半までには埋没したと考えられます。

図１　遺跡の位置（1:25,000）

図２　遺構配置図（1:2,000）

4. まとめ

古代東海道の推定位置において、東海道の南北側溝と考えられる溝を発見し、歴史地理学での想定を発掘調査で実証することができました。今回、高野遺跡で検出された南北側溝から出土した遺物は、８世紀第４四半期から９世紀初頭のものが主体を占めており、平安時代初頭に当地が東海道として機能していたことを表しています。しかし、他の遺跡の状況や文献史料から天智天皇が大津に都を置いた時期前後（７世紀第３四半期頃）から、官道として機能していた可能性もあります(別紙２参照)。

歴史地理学においては、従来、東山道と東海道の分岐地点が問題となっており、おもに３つの説があります。１説目は足利健亮氏の旧説で、守山市街地付近で分岐し、条里地割に沿って栗東市伊勢落に抜けるルートです。道中に「小大道（こだいどう）」という地名があることから挙げられていました（足利 1970・図４）。しかし、この説は後に取り下げられています（足利 1985）。

２説目が服部昌之氏の説で、栗東市手原の JR 手原駅近辺のみほぼ正方位になっている地割から、草津市渋川の伊砂砂（いささ）神社のすぐ北で東山道と分かれ、手原―小野―林―伊勢落と直線で結んだと考えられました（服部 1974・図５）。

３説目は足利氏が新たに出した説で、分岐点を草津市矢倉付近で分岐し、草津市青地町まで東進、北東へ向きを変え、服部氏が唱えた手原の東西道路につながるというものです（足利 1985・図５）。

これまでの発掘調査では、草津市矢倉の坊主東遺跡、矢倉口遺跡、草津市追分町の岡田追分遺跡、大将軍遺跡、栗東市上鈎の上鈎遺跡、下鈎東遺跡などで古代東海道に関係する遺構が発見されており、これらをつなぐルートが想定されています（図６）。このような発掘調査の知見から、現在では３説目が有力となっており、草津市矢倉の坊主東遺跡から分岐すると考えられています。

今回の調査において、手原―伊勢落間における平安時代初頭のルートを確定することができました。当地は野洲川や葉山川に挟まれた地域であり、近代まで両河川の氾濫による水害が起きていました。当地域は条里景観が色濃く残っていますが、乱れた箇所もあり、水害の影響と考えられます。古代東海道もそのような水害の影響で近世東海道の位置に移転した可能性もあり、近世東海道は高く安定した場所を求めて移転したと考えられます。

今回の調査結果では、平安時代初頭における東海道のありようを考えるうえで貴重な成果を得ることができました。

参考資料

・足利健亮（1970）「恭仁京の京極および和泉・近江の古道に関する若干の覚え書き」『社会科学論集』大阪府立大学

・足利健亮（1985）「近江の土地計画」『日本古代地理研究』大明堂

・足利健亮（2000）「近江東海道の変遷」『中近世古道調査報告３　東海道（一）』滋賀県教育委員会

・内田保之（2004）「近江国」『日本古代道路事典』八木書店

・服部昌之（1974）「草津市とその周辺の条里」『草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史歴史地理学的調査報告』滋賀県・草津市

用語解説

(1)古代東海道　古代の行政区画の五畿七道の内の七道の一つで、また、古代に置かれた官道。東国経営の交通路とされ、天武天皇のころ（７世紀後半）にほぼ成立していた。成立時は大和国から伊賀国を通り、東国に抜けていたが、延暦３年(784 年)の長岡京遷都以降に近江国を通過するようになる。

(2)近世東海道　近世の五街道の一つ。慶長６年(1601 年)に徳川家康の朱印状によって各宿に伝馬（荷駄や人を運ぶ馬）を出すことを伝えられ、宿場町の整備がなされた。

(3)脈石　鉱床中に存在し、経済価値がなく採掘対象とならない鉱物。すなわち、必要な金属鉱石を取り除いた後の不要な鉱物。

図３　遺構配置図（1:500）

図４　足利健亮旧説（足利 1985 からトレース）

図５　服部昌之説・足利健亮新説（足利 1985 からトレース）

図６　県内における古代東海道検出遺跡（内田保之氏作成に加筆）

写真１　古代東海道（人が立っているところが路面）

写真２　古代東海道（矢印の間が路面）

写真３　古代東海道北側溝（Ｓ２・黄色のライン）

写真４　古代東海道南側溝（Ｓ１・黄色のライン）

写真５　旧河道跡（西から）

写真６　旧河道跡（東から）

写真７　旧河道跡から出土した須恵器坏身（古墳時代～平安時代）

写真８　旧河道跡から出土した須恵器平瓶（奈良時代）